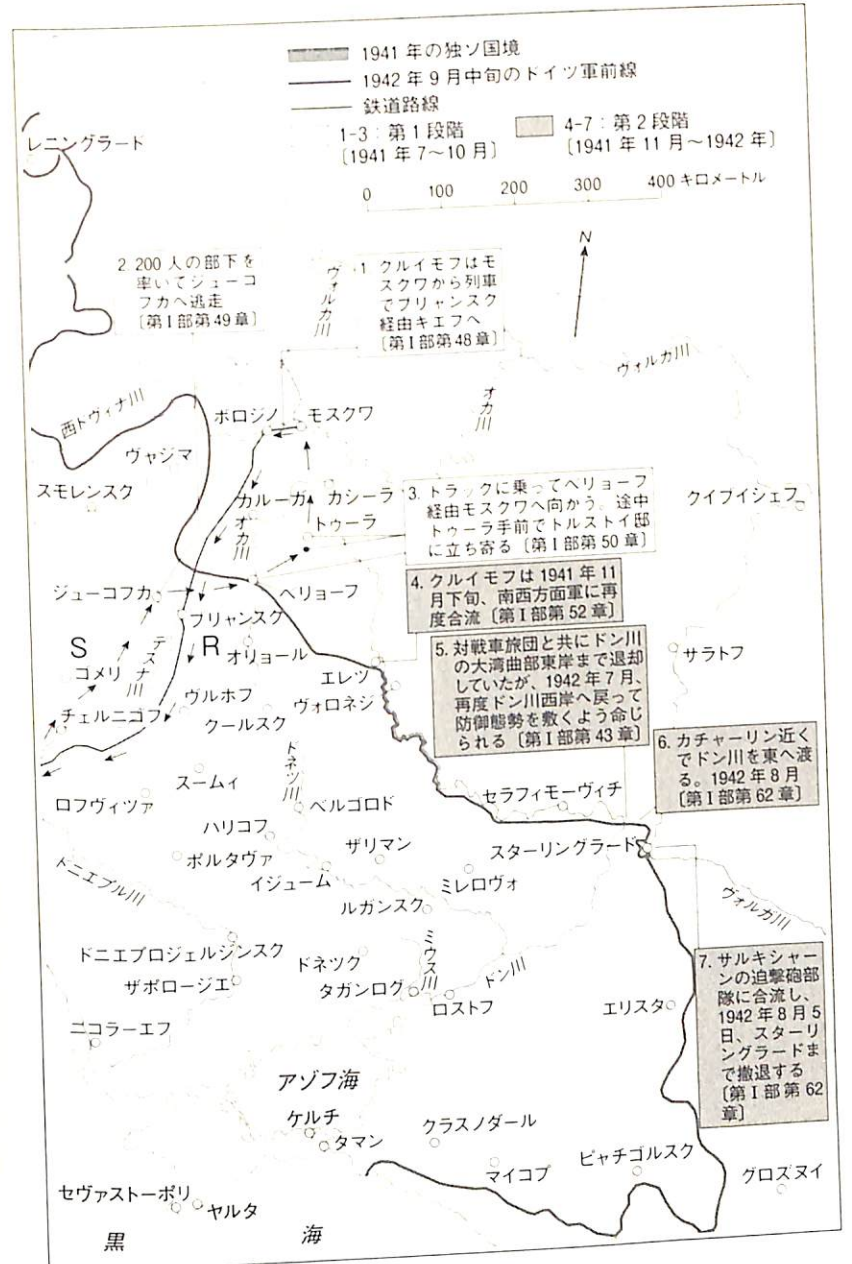
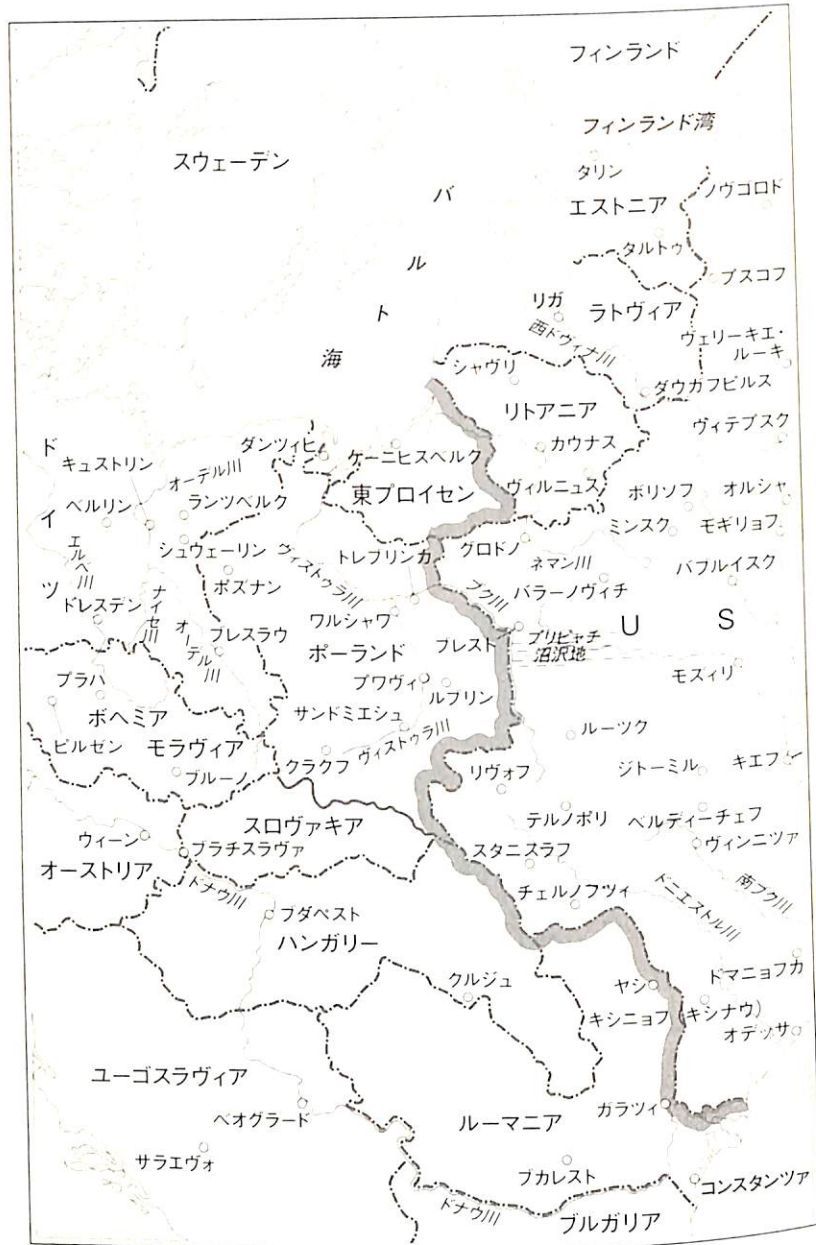
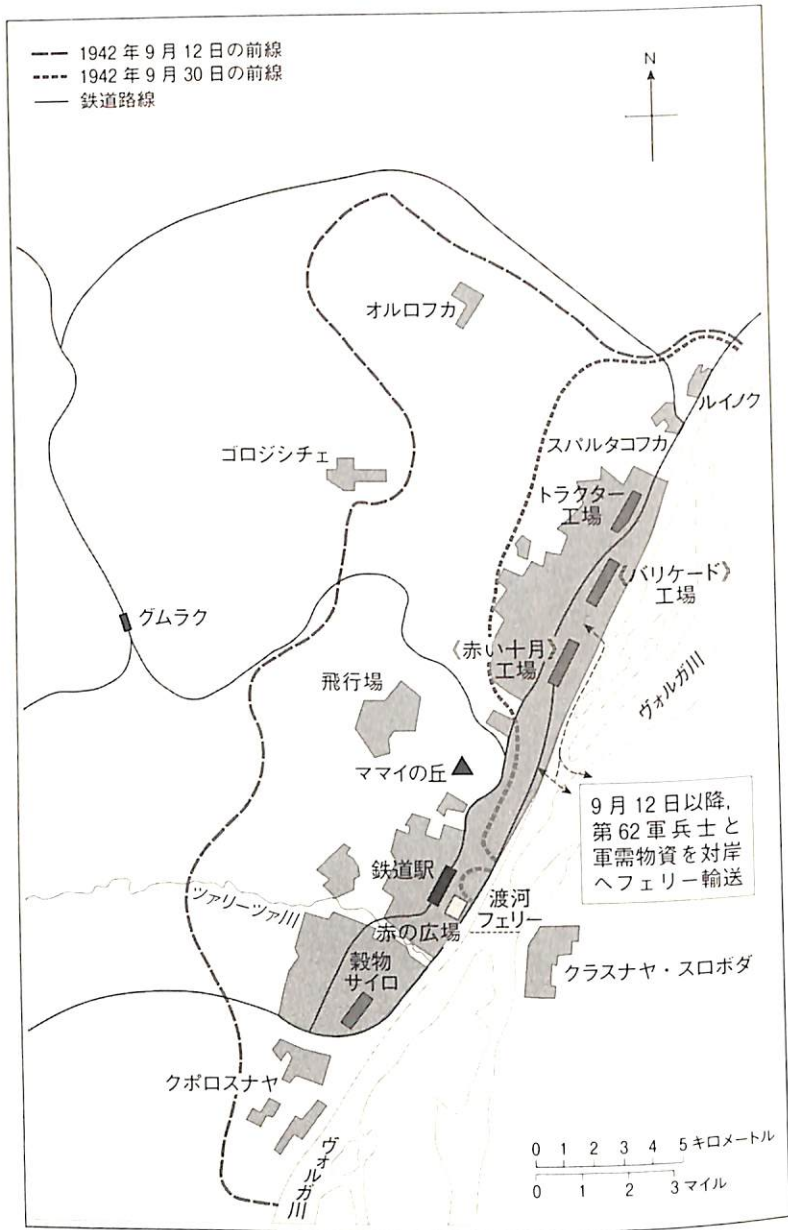


開戦から 15 か月にわたるソ連軍の退却とクルイモフの路程



スターリングラード



スターリングラードとその周辺地域



ロシア人の名前に関する解説と登場人物リスト

ロシア人の姓名は三つの部分からできている。名前〔*Имя*〕＋父親の名前＋姓。例えば、アレクサンドラ・ウラジミロヴナというのは、ウラジミールという名前の男の娘であり、ヴィクトル・パーヴロヴィチというのは、パーヴェルという名前の男の息子である。名前＋父親の名前で呼ぶのが、誰かに話しかけるとき、言及するときの通常のていねいな呼びかけ方であり、姓を使うことはそれほど多くない。親友や親戚のあいだでは、名前の短縮形や愛称で呼び交わされる。例えばリユドミラはリユドミールの、ナージャはナジェージュダの、ペーチャはピョートルの、ワリーヤはワルワラの、ヴィーチャはヴィクトルの短縮形。マーシャとマルーシャはどちらもマリヤの短縮形。はっきり推測しづらいのが、ジェーニヤがエウゲーニヤの短縮形であったり、ワニーヤがイワンの、トリーヤがアナトリーの短縮形だったりする場合だ。また二重指小辞もいろいろある。ヴィーチェンカはヴィクトルの二重指小辞であり、ヴァニエーチュカはイワンの二重指小辞である。

登場人物リスト

このリストを扱いやすい長さにおさえるため、ある一つの章にしかな現れないような人物の大部分は載せていない。例えば、国営発電所の従業員や、ヴェーラとソフィヤ・オーシボヴナ・レヴィントンが勤める病院のスタッフなどがそれに当たる。リストの組み立てに一貫性を持たせることは意図していない。軍隊のように明確な階層がある場合には、最上級の人間が最初に来るようにしてある。それ以外はアルファベット順だが、一定の小集団——大家族の中の小家族など——はまとめて表示してある。歴史上実在の人物には*を付した。

〔登場人物がフルネームで言及されることは稀で、姓か名だけの場合が多い。頻繁に使われる呼び名を太字にした。参考までに把握できないしは推定年齢を(20)のように表した〕

1 民間人

■ シャーポシニコフ家関連

アレクサンドラ・ウラジミロヴナ・シャーポシニコワ (70) ……一家の母家長

リユドミラ・ニコラーエヴナ・シャーポシニコワ (38) ……アレクサンドラの長女

アバルチューク (38) ……リユドミラの最初の夫。一九三七年に逮捕

アナトリー (トリーヤ)・シャーポシニコフ少尉 (19) ……リユドミラとアバルチュークの息子

ヴィクトル・パーヴロヴィチ・シュトルム (38) ……リユドミラの夫。物理学者

ナージャ…ヴィクトルとリユドミラの娘

アンナ・セミョーノヴナ…ヴィクトルの母親

マルーシャ・スピリドノワ (マリヤ・ニコラーエヴナ) (35) ……アレクサンドラの次女

ステパン・フォードロヴィチ・スピリドノフ…マルーシャの夫。スターリングラード国営発電所の所長

ヴェーラ・スピリドノワ (18) ……ステパンとマルーシャの娘

ジーナ・メリニコワ (21) ……ヴェーラの親友

ヴィークトロフ軍曹(20)……戦闘機パイロット、ヴェーラの恋人になる

ドミートリー・シャーポシニコフ(38)……アレクサンドラの息子、一九三七年に逮捕、白海・バルト海運河の強制労働収容所へ送られる

イーダ・セミヨノヴァ(35)……ドミートリーの妻

セリヨージヤ・シャーポシニコフ(16)……ドミートリーの息子、アレクサンドラが養子として迎え入れる

エヴゲーニヤ(ジェーニヤ)・ニコラーエヴァ・シャーポシニコフ(26)……アレクサンドラの三女

ビョートル・パーヴロヴィチ・ノヴィコフ大佐……ジェーニヤとの結婚を望む、戦車隊の指揮官

ニコライ・グリゴリエヴィチ・クルイモフ(39)……ジェーニヤの前夫、赤軍のコミサール

【クルイモフに関する補足・訳者注】

第43章は本書中で初めてコミサールとなったクルイモフが、一九四二年夏の戦場に登場する章である。彼がこれ以前に登場したのは第33章で、当時はまだ出版社に勤めていた。

出版社から軍隊への転籍とは唐突だが、ここまでその経緯説明はない(第42章でヴィクトルがチェプイジンと対話する中、彼について現在はコミサールをやっていると言及されただけ)。経緯詳細はこのあと一九四一年を振り返る第48章で遅ればせながら説明される。

第48章以下第52章までは前年の回想。一九四一年、コミサールとしてモスクワからキエフへ向かう彼の行程と、キエフから部下二百名を率いて行軍、そして最終的にモスクワへ帰還し、その後南西方面軍に再度合流する。

第54章(中巻)以下第61章までは戦場を離れ、スターリングラードやモスクワにおけるシャーポシニコフ家関連の人々についての描写となる。

第62章にて場面はふたたび、第43章から第46章までで中途半端になっていた一九四二年夏の戦場へと戻り、クルイモフを含むソ連軍はドイツ軍に押されてドン川を西岸から東岸へ渡る。その後、彼は迫撃砲部隊に配属となりスターリングラードへ向かう。

■ シャーポシニコフ家の友人

パーヴェル・アンドレーヴィチ・アンドレーエフ(65)……製鉄所の従業員

ソフィヤ・オシホヴァ・レヴィントン(58)……陸軍病院の外科医

ミハイル・シードロヴィチ・モストフスコイ……古参のポリシェヴィキ(彼の下宿の女主人がアグリッピンナ・ヘトロヴァ、そしてガガーロフは彼の旧友)

タマラ・ベリヨースキナ……難民でシャーポシニコフ家をととき訪れる、ベリヨースキン少佐の妻

■ パーヴェル・アンドレーエフの家族および交友関係

ワルワラ・アレクサンドロヴァ……彼の妻

アナトーリー……パーヴェルとワルワラの成人した息子

ナターリヤ……アナトーリーの嫁

ヴォロージャ……アナトーリーとナターリヤの幼い息子

ミーシャ・ポリャコフ(60)……アンドレーエフのかつての戦友

■ タマラ・ベリヨースキナの家族

イワン・レオンチェヴィチ・ベリヨースキン(40)……彼女の夫、歩兵部隊の少佐

スラーヴァ……彼女らの息子

リユーバ(5)……彼女らの娘

■ ヴィクトル・シュトルームの同僚

ドミートリー・ペトロヴィチ・チエプイジン……ヴィクトルの恩師。アカデミー会員
アンナ・ステパーノヴナ・ロシヤコワ……実験室助手

イワン・イワノヴィチ・マクシモフ……生化学者。最近チェコスロヴァキアから帰ってきた
ピメノフ……一九四二年春から物理学研究所の所長代行

レオニード・ポストエフ……著名な物理学者、アカデミー会員
アーラ・ポストエワ……その娘

ピョートル・ラヴレンティエヴィチ・ソコロフ (30) ……数学者、ヴィクトルの同僚

イワン・ドミートリエヴィチ・スーホフ……一九四二年春まで物理学研究所の所長

■ スターリンググラードの州党委員会

イワン・ハーヴロヴィチ・ブリャーヒン……第一書記

バルーリン……その助手

ミハイロフ……軍事課課長

フィリーポフ……執行委員会の副委員長

ジールキン……オブコム食堂の管理人

■ スターリンググラードの児童養護施設

エリザヴェータ・サヴェリエヴナ・トカレワ……所長

クラウワ・ソコロワ……助手（ナターリヤ・アンドレーエフの友人）

スラーヴァ・ペリョースキン……イワンとタマラ・ペリョースキンの息子

グリーシャ・セルボクルイル……心的外傷を受け、ろうあ者であるらしい孤児

■ ピョートル・ヴァヴィーロフと彼の家族および交友関係

ピョートル・セミョーノヴィチ・ヴァヴィーロフ (45) ……コルホーズ労働者、フィリヤーシキン大隊に配属

マリヤ・ニコラーエヴナ……その妻

アリョーシャ、ナースチャ、ワーニャ……その子どもたち

マーシャ・バラシヨールワ……若き隣人、ナースチャの友人

ナターリヤ・デゲチャリヨールワ……隣人

■ モスクワ会議（ヴィクトルが出張して出席）での上級エンジニアと工場長たち

アンドレイ・トロフィーモヴィチ……同会議の最古参、人民委員部メンパー

シェプチェンコ……最近ウラル地方へ疎開した金属工場の所長

セミヨン・クルイモフ……ニコライ・クルイモフの弟、シベリアにある工場の首席エンジニア

スヴェルチコフ……ウラル地方から来た工場の所長

■ イワン・ノヴィコフと炭鉱関係者

イワン・パーヴロヴィチ・ノヴィコフ (45) ……ノヴィコフ大佐の兄。経験豊富な炭鉱労働者、立坑掘削上級作業員

インナ・ワシリーエヴナ……彼の妻、教師

マーシャ……彼らの幼い病弱な娘

ブラギンスカヤ……ロシアに帰化したポーランド人、トロッコ引き
ガヴリーラ・デヴヤートキン……立坑掘削作業員
コートフ……立坑掘削作業員、オリョール出身
イワン・クズミッチ……州党委員会（州党委員会）で産業担当の書記
ラブシン……石炭公社の社長
ラトコフ……坑木敷設作業員
ニユーラ・ロバーチナ……かつてコルホーズ労働者、今はトロッコ引き
メシニコフ將軍……戦車用装甲板を製造する工場の所長
モトーリン……炭鋳党委員会書記
ロゴフ……課長
ヴィンケンチュエフ……シベリアで炭鋳労働の経験を積む、今は坑木敷設作業員
ヤーゼフ……炭鋳所長
ゲオルギー・アンドレーヴィチ……国家防衛委員会の代表

2 軍人（*は実在の人物）

■ ニコライ・クルイモフと包囲網を脱出した人々
ハトロフ……軍医
シゾーフ……彼の斥候長
スコロハード……彼の食糧調達管理者
スヴェテリニコフ……彼の参謀長

■ ニコライ・クルイモフと第五〇軍本部にいた人々
ペトローフ少將……第五〇軍司令官
シユリヤーピン……彼の旅団コミサール

■ ニコライ・クルイモフと南西方面軍にいた人々
セミョーノフ……彼の運転手
ゲネラーロフ上級軍曹
ゴレリク中佐……彼の旅団指揮官
コスチュコフ……彼の旅団参謀長
モローゾフ少尉
サルキシヤーン中尉*……重迫撃砲師団指揮官
セリードフ……照準手
スヴィストウーン少尉……スターリングラードでの高射砲隊指揮官

■ ピョートル・ノヴィコフと南西方面軍にいた人々
セミョーン・ティモシエンコ元帥*……南西方面軍最高司令官
アフナーシー・ゲオルギエヴィチ・ブイコフ少將……ノヴィコフの直属の上官
チェブラーク大隊コミサール……軍事評議会書記
ヴィターリ・アレクセーヴィチ・ダーレンスキー中佐（35）……有能な將校、貴族階級の出
イワーンチン……軍事評議会メンバー（最上級コミサール）

アングレリーナ・タラーソヴナ……最高のタイピスト

■ モスクワ参謀本部

ヤーコフ・フェドレンコ上級大將*……赤軍機甲兵総監
イワーノフ大佐……参謀本部勤務、ノヴィコフの友人
アンドレイ・フルリョーフ大將*……国防人民委員部人民委員代理（一九四一年八月以降）
ズヴェズデューヒン中佐……幹部課の役人

■ 従軍記者

ポローヒン……ソ連軍主要機関紙「赤い星」の特派員、象徴派の詩を愛する
ズバーフスキー……ラジオ番組の「ラジオの最新ニュース」の特派員

■ スターリングラードの将校と兵士たち

アンドレイ・エリョーメンコ上級大將（50）*……スターリングラード方面軍最高司令官
アゲエフ大佐（42）……エリョーメンコの砲兵隊指揮官
ワシーリー・チュイコフ中將（42）*……第六二軍指揮官
クジマ・グーロフ中將*……師団コミサール、軍事評議会メンバー
ニコライ・クルイロフ少將*……チュイコフの参謀長
ホジヤールスキー*……チュイコフの砲兵隊指揮官
グーリエフ少將*……師団指揮官
グーレルチェフ大佐*……師団指揮官

ジョーデルデフ將軍*……師団指揮官

リュードニコフ將軍*……師団指揮官

バチューク中佐*……師団指揮官

ゴリーシユスイ大佐*……師団指揮官

ロディームツェフ少將（37）*……第……親衛師団指揮官

ペリスキー少佐……彼の参謀長

ヴァヴィーロフ……彼の師団コミサール（コルホーズ労働者とは別人）

マチューシン中佐……連隊指揮官

エーリン中佐*……連隊指揮官

フィリヤーシキン中尉（30）……大隊指揮官

シユヴェトコフ大隊コミサール……彼のコミサール

イゲームノフ少尉……大隊参謀長

コナスイキン中尉……フィリヤーシキンの第一中隊指揮官

コヴァリョーフ（ミーシャ）少尉（20）……フィリヤーシキンの第三中隊指揮官

コトローフ……彼の政治指導員

マールチェンコ曹長……コトローフが負傷したあとコヴァリョーフの右腕となる

ドドノフ上級軍曹……告げ口屋、結局は脱走兵となる

レーナ・グナチューク上級軍曹……医療教官

ムリヤルチューク……前職ベチカの掘付工

レズチコフ……中隊一の冗談好き

ルイシエフ……前職落下傘部隊員

ウスマーノフ……ウズベキスタン人
ウスーロフ……前職中央アジアの運転手
ビョートル・セミョーノヴィチ・ヴァヴィーロフ(45)……前職コルホーズ労働者
ザーイチェンコフ……前職会計士

■ セリョージャ・シャーポシニコフの軍隊仲間

クリヤーキン……中隊指揮官
ブリュシニコフ……小隊指揮官
チエンツォーフ……かつて建設技術大学の大学院生
ガリゲーゾフ……砲兵隊指揮官
グラードウソフ……前職住宅建設局の小役人
イリユーシユキン……まぬけな兵士
ホリャコフ(60)……前職大工、ハーヴェル・アンドレーエフの友人
シユミード……中隊の政治指導員

3 ドイツ人

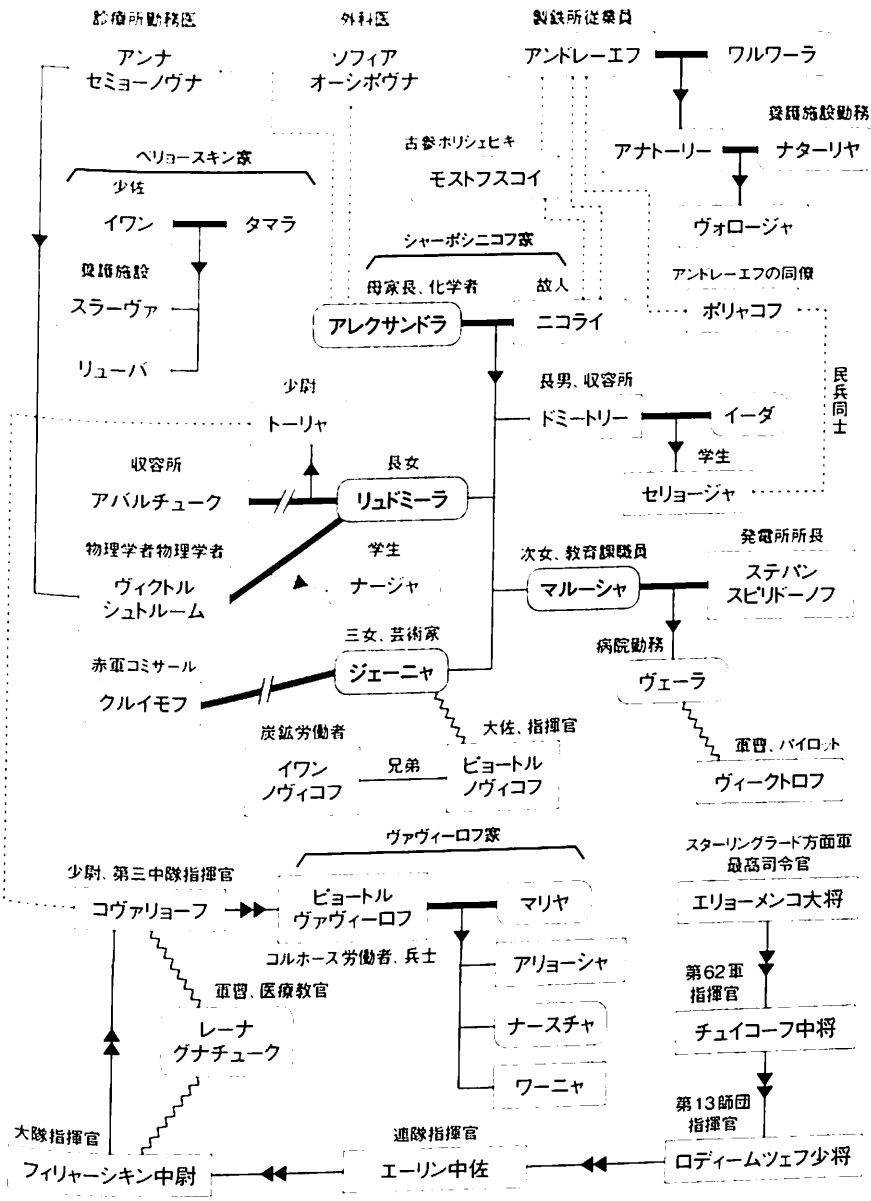
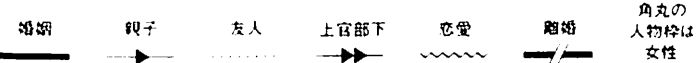
フリードリヒ・パウルス上級大将*……第六軍司令官
アダム大佐*……彼の副官
フランツ・ヴェラー將軍*……擲弾兵師団指揮官
リヒトホーフエン上級大将*……第四航空軍団司令官

フォルスター大佐……参謀将校
ペーター・バッハ中尉(30)……フォルスターの娘マリアと婚約
プライファイ大尉……大隊指揮官
レナルト中尉……親衛隊将校
レデケ、シュトゥンプフェ、フォーゲル……三人の友人
カール・シユミット……兵卒、かつての共産党員

登場人物相関図

作成：園部哲

凡例



まえがき

ワシーリー・グロスマンの小説『人生と運命』(一九六〇年完成)は二十世紀の『戦争と平和』である
と称賛されてきた。ヨーロッパの大半の言語だけでなく、中国語、日本語〔齋藤統二訳、みすず社、二〇一二年〕、朝鮮語、ト
ルコ語、ベトナム語にも翻訳されている。また舞台作品やテレビドラマのシリーズ物が制作され、BBC
ラジオによる八時間のドラマ化もなされてきた。しかしながら大半の読者は、グロスマンが『人生と運
命』をそもそも単体独立の作品として構想していたわけではないことを知らない。正確にいうと『人生と運
命』は、スターリングラード戦を扱って密接につながった二つの作品の後編といえることができ、この二
つは『二部作』と呼ぶのがふさわしい。二作品のうち前編の初出版は一九五二年のことで、『正義の事業
のために』という題名がつけられていた。しかしグロスマン自身は『スターリングラード』という題名を
望んでいた——よって、この翻訳の題名としてはそちらを選んだ。

両作品の登場人物はおおむね共通、筋書きにも一貫性がある。『人生と運命』が始まるのは『スターリ
ングラード』が終わる一九四二年の九月末からだ。アイコンニコフ〔アイコンニコフ・モルジュ、ドイツの捕虜収容所で因
が書いた「意味のない善意」についてのエッセイ——現在では『人生と運命』の一部になっていて、かつ
同書の中核と見なされることも多い——はもともと『スターリングラード』の一部だった。『人生と運命』
でもうひとつ印象深い部分——ヴィクトル・シュトルーム〔グロスマンの分〕の母親がベルディーチェフ〔グロス

スターリン STALINGRAD ゲラード^上

ワシーリー・グロスマン [著]
Vasily Grossman

ロバート・チャンドラー [校訂]
エリザベス・チャンドラー

園部哲 [訳]



一九八四年三月五日印刷
一九八四年三月五日発行

著者略歴

奥定泰：一九二四年生

奥定泰：一九二四年生、福島県生まれ。一九四九年、横浜女子大学社会学部卒業。日清物産入社。同社退職後、翻訳者として、児童書、学術書、経済書の翻訳に従事。

岩堀雅：一九三〇年生、東京生まれ。上野、立教大学卒業。第一帝國大学経済学博士。上野、白水社、ほか多数の自著。岩堀夫人の作品を数冊訳す。身長社社長。

園部：一九三〇年生、東京生まれ。上野、立教大学卒業。第一帝國大学経済学博士。上野、白水社、ほか多数の自著。園部夫人の作品を数冊訳す。身長社社長。

白水社：創立於一九二五年。東京神田区千代田区神田小川町三の三四

電話 営業部 三三三九九、七六二、編集部 三三三九九、七八二、

振替 九二五二二八

郵便番号 一〇〇一五二

著者 ワシリー・グロスマン

訳者 園部

装丁者 奥定泰

発行者 岩堀雅

印刷所 株式会社三陽社

発行所 株式会社白水社

製本株式会社

ISBN978-4-560-09274-3

Printed in Japan

本書のスキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を著者
の許可を以て行ない、著作権者に依頼してデジタル化して印刷し、
本誌やウェブ上で認めていただき、個人や家庭内での利用であつても
著作権法上認められていません。

東京都千代田区神田小川町三の三四
電話 営業部 三三三九九、七六二、
編集部 三三三九九、七八二、
振替 九二五二二八
郵便番号 一〇〇一五二
www.hakusisha.co.jp
乱丁・落丁本は、送料小社負担にて
お取り替えいたします。